

風景デザインレーター from 九州(第 16 号)

前回に引き続き、PENで街の風景写真を撮ることを再度整理してみようと思いましたが、写したいものを写す、30年以上も前の駆け出しのころの写真家アラキーの写真、そしてエッセーを少し参考にして、

荒木経惟の「写真の旅」を読み、PENで撮りながら

写真に撮りたい風景とは

写真に撮りたい風景、絵にした風景というものを考えるときに、その逆を考えるのも手法としてある。さて、写真に撮りたくない風景、描きたくない風景とはどういうものか。

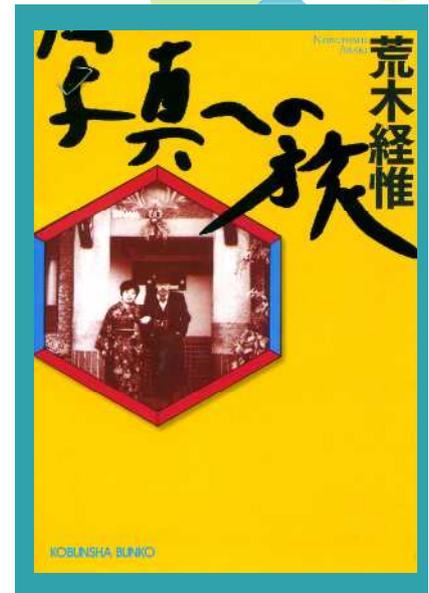
まず、「**印象に残らない風景**」というものがある。どこにでもある風景、価値という視点で見ると希少価値のない風景。しかし、これは印象としてそう思っている、いつの間にか失われていく風景というものがあり、常に、その希少性に対してはチェックしていく目をもたなければいけない。そうでなければ、かつての日本には、どこにでもあったであろう懐かしい里の風景というものは、あんまりみられなくなってしまう、ということとなる。また、希少価値に限定することではなく、どこにでもあるが美しい風景というものも当然あり、これは、希少価値として記録に残しておく意味で写真にとる必要はないのかもしれないが、実際に生きている空間の素晴らしさを理解するために写真に撮る、あるいは、絵として描くことがあってもいい。従って、この**印象に残らない風景**というのは、どうでもよくて印象に残らないのか、当たり前として感じているから印象に残らないのかを区分することが必要になる。

「**ごちゃごちゃしたまとまりのない風景**」というものもある。前回、エントロピーの話をしたが、これが増大してしまっている風景のことで、片付いていない部屋のような

もの。片付けられていない風景というのは何だ？ゴミの散らかっている街並みの風景や、ゴミ捨て場になっている河川敷のような風景があるだろう。それとは別に、ごみではないが、統一感がないごちゃごちゃした風景もあるだろう。デザインの統一感がないもの、色や様式や素材、大きさなどが、ばらばらの街並みなんかそうだ。

「**人工的な場所**」例えば工場敷地のような生産現場が風景として存在する場合のことで、山を削った碎石場のような自然の中の空間の場合もある。一方、ビル街のような人工的な空間ではあるが、ここには風景が存在する。人工的な場であっても、生産現場でなければ風景となりうるのか。いやそれは違うだろう。生産現場でいえば農地などは、美しい風景の場になる。人工物だけが存在する生産現場ではどうだ。プラントやコンビナートのような風景。最近は、このような空間も風景として見れるようになってきた。経済発展のときには、風景としての印象は持ち得ないが、脱工業のような現在、工業地帯への哀愁のような感情が生まれてきているのかもしれない。廃れつつあるものへの撞着のようなものかもしれない。ものを生み出さない人工的な空間としては、ゴルフ場や遊園地のような空間もあるが、これはまた別のところで考えよう。

「**単純な風景**」有明海の広大な干潟は、単調ではあるが多様な世界が広がるという。最も単純な風景とは、どのような風景だろう。



サハラ砂漠のように砂だけの風景、あるいは、北極のような一面氷に覆われた世界。しかし、これらは単純に見えてそうでない。むしろ、規格的な家屋が並ぶ分譲住宅地のほうが単調な印象を受ける。

「**汚れた場所、廃屋・廃棄された場所**」さきほどのごちゃごちゃした風景のようなゴミ捨てられてきたないとか、落書きされた壁のような場所は、確かに汚い。なにか、人間の心の汚さを写し込んだような風景。しかし、の人工的風景の工場敷地のように廃棄された場所に哀愁を感じるのであれば、なにか存在を感じることができる。また、この汚れた場所という反対後は「きれいに整理された場所」となるが、そこで使う「きれい」は、美しさと同義ではない。この場合は美醜の問題でなく清潔か否かの問題である。清潔な手をきれいな手という。もちろん造形的に美しい手もきれいな手であるが、

「**偽物の風景**」ここには二つの意味があり、一つは、ディズニーランドのような虚構空間、あるいは映画のセットのような張りぼての空間としての偽物というもの、虚構でなく実態はあるのだが、どこかのパクリをやった建築物がある風景のようなものがある。

「あるべき風景でない風景」これは、今の偽物の風景と似てはいるが、どうだろう。現在建設中の押上に生まれるスカイツリー。これなどは、あるべき風景ではない所にそのものがあるという意味で、この区分に該当する。しかし、前回のエッフェル塔でも書いたように、特に、悪いことではない。慣れというものもあるし、逆に、その新しい存在に合わせて街づくりが進み結局調和した存在になることもある。

「息吹を感じられない風景」死んだ景観のような一見美しい、というよりはきれいに見えるが、実は誰もいない、生き物がそこでは育てない風景。この生命の息吹を感じられない空間というものは、どう考えても、写真に写し取りたい風景ではない。

身の回りの風景をこの分類？で見たときに、どこに該当するのか。街の景観のチェックリストにしてみるか。さて、このように分類することで考えてみたが、当初の目的である写真に撮りたい風景、あるいは絵になる風景の答えはであるだろうか。「人のあるいは生き物や大地の息吹が感じられ、作りものでない、まとまりのある空間」を見ると私たちは写真に撮りたい風景として感じるのではいか。さて、どうだろう。……

ということ思いながら、紹介したアラキーこと荒木経惟の「写真の旅」を見た。ここで紹介されている多くの写真は、写真に撮りたくないとしたどれもが当て

はまる絵ばかりである。写真にしたいくない絵の分類に該当するものばかりである。

彼が写真を撮りたいと考える動機が、私たちが撮りたい風景といういわゆる美しい写真には「よそゆき」の感じがするといい、荒木は、まず、この「よそゆき」の着物を脱ぐところから始めなければいけないと解説する。身の回りには、もっと身近な風景があふれているし、それは、なかなか居心地のいいものであると。さて、そういわれると私は、美しい風景という呪縛にかかってしまっているのだろうかと考え込んでしまう。日常的に接する風景というものは、もっと、おおざっぱで、荒削りで、そのくせ懐かしさを感じるという、そういうものかもしれないと、考え直してしまう。写真に撮りたい風景というものは、アラキーが言うように、もっと身近にある風景であり、遠くの風景写真ではないのかもしれないと。

確かに、荒木は自分でダイアン・アーバス（女性写真家で、奇形をモチーフにしている）を尊敬しているようで、通常感覚・感性ではないかもしれないが、やはり、どこか引っかかる。彼は、異常なものや奇形なものを撮っている訳ではない。そして、当然、彼の写真を見ることで不快感は沸いてこない、むしろ、懐かしさ、いや、安心感をもつ。たしかに、この本自体は、30年以上も前のものであり、映っている写真に懐かしさを覚えるのは当然だが、今の現実の状況を、このような目線で見

ることはできる。「よそゆき」ではない見方で。

そう、私たちは、もっと身近な街の風景を見るという行為を行わなければいけないのではないか。少なくとも、街づくりは、その街に住む人々の日常の生活があり、それを受け入れる受け皿としての街であるべきであるから。そこで生活する彼らは、決して「よそゆき」の街を望んでいる訳ではないだろうから。

絵にならない風景の考え方は、人間と同じように、いろいろのタイプがあってよく、排除すべき景観は、人間社会で言うところのヤクザな風景と、病気にかかった風景であり、ヤクザな風景は更生させなければいけないし、病気の風景は治療しなければいけない、そんな程度の見方でどうだろうか。シンボリックな景観、つまりは人間社会のスター的な存在を、数多くつくることが目的ではないと思うが、いかがなものだろうか。

【続く】